薬屋のひとりごと

うりぼう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
薬屋のひとりごと

【Ｎコード】
Ｎ９６３６Ｘ

【作者名】
うりぼう

【あらすじ】
薬草を取りに出かけたら、後宮の女官狩りに遭いました。
花街で薬師をやっていた猫猫は、そんなわけで雅なる場所で下女などやっている。現状に不満を抱きつつも、奉公が明けるまでおとなしくしていようと思うのだが、彼女の好奇心と知識はそうはさせない。
ふとした事件を解決したことから帝の寵妃や宦官に目をつけられる

ことになる。

早く市井に戻りたい、猫猫はきょうも洗濯籠を片手にため息をつくのだった。

1　猫猫

（露天の串焼きが食べたいなあ）

曇天を見上げて猫猫は溜息をついた。

周りは自分が今まで見た中で最も美しくきらびやかな世界、そして瘴気蠢く濁った澱の中だった。

（もう三か月かあ、おやじ、飯食ってんだろうか）

先日、薬草を探しに森に出かけてみれば出会ったのは、村人その壱、弐、参という名の人さらいでした。

まったく強大で迷惑極まりない結婚活動、略して婚活、宮廷の女狩りである。

まあ、給金はもらえるし、二年ほど働けば市井に戻れなくもないので、就職先としては悪くないのだが、それは個人の意思で来た場合である。

薬師としてそれなりの生活をしていた猫猫にははた迷惑な話なのだ。

人さらいどもは、妙齢の娘を捕まえては宦官に売り酒代を稼いだか、それとも己の娘の身代わりにさせたのか猫猫にはどうでもいい話である。どんな理由があれ、とばっちりを受けたのは変わらないのである。

でなければ、後宮なる場所に一生関わりたくなかった。

むせ返る化粧と香、美しい衣に纏った女官の唇には薄っぺらい笑み

が張り付いていた。

薬屋をやってきて思うこと、女の笑みほど恐ろしい毒はないと。
それは殿上人の住まう御殿も城下の花街も変わらないのだと。

足元に置いた洗濯籠を抱え、建物の奥に向かう。表とは違い、殺風景な中庭には石畳の水場があり、男とも女ともつかない召使たちが大量の洗濯物を洗っていた。

後宮は基本男子禁制である。入れるのは、国で最も高貴なかたとその血縁、あと大切なものを失った元男性だけである。もちろん、そこにいるのは後者である。
歪だと思いつつ、それが利にかなっているからやっていることなのだろうと猫猫は考える。

籠を置くと、そばの建物の中にある並べられた籠を見る。汚れ物ではなく、日の当たった洗濯済みのものだ。

持ち手にかけられた木札を見る。植物を模した絵と数字が書かれている。

女官の中には字が読めないものもいる、なんせ人さらいのごとく浚われたものさえいるのだから。宮廷に連れ込まれる前に最低限の礼儀くらいは教えられるが、文字となると難しい。識字率は田舎の娘で半分越せばいいほうなのである。

大きくなり過ぎた後宮の弊害といえる、量は増えたが質が悪い。
先帝の花の園には到底及ばないものの、妃、宮女合わせて二千人、宦官を加えると三千の大所帯だった。

猫猫はその中で最下層の下女であり、官職すらもらっていない。特に後ろ盾もなく、浚われて数合わせにされた娘にはそれが妥当なところである。まあ、牡丹のような豊満な肉体や、満月のような白い肌でも持っていればまだ、下妃の位につける可能性もあったかもしれないが、猫猫の持つのはそばかすの浮いた健康的な肌と枯れ枝のような手足くらいである。

（はやく仕事終わらせよう）

梅の花と『壱七』と書かれた札の籠を見つけると、小走りに歩く。重く曇った空が泣き出す前に部屋に戻りたかった。

籠の洗濯物の主は、下級妃嬪である。与えられた個室は他の下妃に比べ調度の質が豪華だが派手すぎる。部屋の主は、豪商の娘かなにかと予想される。位持ちともなれば自分専用の下女を持つことができるが、位の低い妃はせいぜい二人までしか置くことができない。ゆえに、猫猫のような特に使えるべき主人のいない下女がこうして洗濯物を運んだりするのである。

下級妃嬪は後宮内で個室を持つことを許されているが、場所は宮内の端にあり、皇帝の目につくことはめったにない。それでも、一度でも夜伽を命じられれば部屋の移動ができ、二度目の御手付きは出世を意味している。

一方、食指を動かされることなく適齢を過ぎた妃は、よほど実家の権力がない限り位が下げられるなり、最悪、下賜されてしまう。それが不幸かどうかは相手にもよるが、宦官に下賜されることを宮女たちは一番恐れているようだ。

猫猫は扉を軽く叩く。

「そこにおいといて」

扉を開け無愛想な返事をするのは、部屋付の侍女だった。
中では、甘ったるい匂いを漂わせた妃が酒杯を揺らしている。
宮内に入る前は誉めそやされた美しい容姿であるが、所詮、井の中の蛙だったのであろう。絢爛の花々に気圧され、鼻っ柱を折られ、最近は部屋の外にも出ようとしなくなった。

（部屋の中じゃあ、だれも迎えに来てくれないよ）

猫猫は隣の部屋の洗濯籠をもらうと、また洗い場に戻った。

仕事はまだたくさん残っている。
好きできたわけではないが、お給金はいただいているのでその分の働きはするつもりである。

基本は真面目、それが元薬屋猫猫である。

大人しく働いていればそのうち出られる。
まさか、御手付きになることはありえないだろう。

残念なことに猫猫の考えは甘かったといえる。
何が起こるかわからない、それが人生というものだ。

齢十七の娘にしては達観した思考の持ち主であるが、それでも押さえられないものがあった。

好奇心と知識欲。

そして、ほんの少しの正義感。

この数日後、猫猫はある怪奇の真相を暴くことになる。

後宮で生まれる乳幼児の連続死。

先代の側室の呪いだと言われたそれは猫猫にとって怪奇でもなんでもなかった。

2　二人の妃

「あーあ、やっぱりそうなんだ」
「ええ、お医者様が入っていったのを見たって」
汁物をすすりながら猫猫は耳を傾ける。広い食堂には数百人の下女が朝餉をいただいていた。内容は汁物と雑穀の粥である。
斜め前に座っている下女が噂話を続ける。気の毒そうな表情をしているが、それ以上に好奇心が目の奥で輝いていた。
「玉葉さまのところも、梨花さまのところにも」
「うわー、二人ともなんだ。まだ、半年と三か月だっけ？」
「そうそう、やっぱり呪いなのかしらね」
でてきた名前は、皇帝のお気に入りの妃たちの名前である。半年と三か月というのはそれぞれが生んだ宮のことであろう。
宮内では噂話が闊歩する。それは、帝の御手付きの宮女の話やお世継ぎについて、はたまたいじめや僻みによる悪評もあれば、うだる暑さにふさわしい怪談めいたものまである。
「そうよね、でなければ三人も亡くなられるわけないわ」
それは、妃たちの生んだ子ども、つまり世継ぎとなられる宮たちのことを指していた。東宮時代に一人、皇帝になられてから二人、どれも乳幼児のころに見まかれている。幼子の死亡率が高いのは当たり前であるが、殿上人の子が三人ともとなるとおかしい。

現在、玉葉妃と梨花妃の二人の子どもだけが生き残っている。

（毒殺ではなかろうか？）

白湯を含みながら猫猫は考えるがそれは違うと結論に至る。
三人の子どものうち、二人は公主だったからだ。男子にのみ継承権の与えられる中で、姫君を殺す理由などほとんどない。

前に座っている二人は箸も進めず、呪いだの祟りだの言っている。

（だからといって呪いはねえ）

くだらない、その一言である。呪いをかけるだけで一族郎党皆殺しとなる法まである中に猫猫の考えはむしろ異端といえる。しかし、猫猫の頭にはそれが言い切れる根拠となる知識があった。

（なんらかの病気か？もしかして遺伝的なもの？どういうふうに亡くなられたのだろう？）

無愛想で無口と言われた下女がおしゃべりな下女たちに話しかけたのはそのときだった。

好奇心に負けて後悔するのはそれからしばらくのことである。

「くわしくは知らないけど、皆、だんだん弱っていったってきくわ」

おしゃべりな下女、小蘭は猫猫が話しかけてきたことに興味を持ったらしく、その後もことあるごとに噂話を教えてくれた。

「お医者さまの訪問回数から、梨花さまのほうが重いのかしら？」
窓の桟を絞った雑巾で拭きながら言った。
「梨花さまご自身？」
「ええ、母子ともによ」
医師が梨花妃のほうに出向くのは、病の重さというより東宮だからであろう。玉葉妃の子は公主である。
帝のご寵愛は玉葉妃のほうに重いが、生まれてくる子に性差があればどちらを重きに置くかは明白である。
「さすがに詳しい症状はわからないけど、頭痛とか腹痛とか、吐き気もあるっていうけど」
小蘭は知っていることをすべて話すと満足したらしく、次の仕事に向かう。
猫猫はお礼代わりに、甘草入りの茶を渡す。中庭の隅に生えていたもので作ったのだ。薬臭いが甘味は強い。甘味を滅多に食べられない下女はとても喜んでくれた。
（頭痛に腹痛に吐き気か）
思い当る症状だったが、決定打はない。
予測だけで物事を考えるのはいけないと、散々おやじどのから言われていた。
（ちいとばかし、行ってみるか）

猫猫は手早く仕事を終わらせることにした。

後宮と一括りに言ってもその規模は広大である。常時、二千人の官女に、泊まり込みの宦官は五百をこえる。
猫猫たち下女は大部屋に十人単位で詰め込まれているが、下妃は部屋持ち、中妃は棟持ち、上妃は宮持ちと大きくなり、食堂、庭園を含めれば地方都市よりもずっと広いのだ。

ゆえに、猫猫は自分の持ち場である東側を出ることはない。用事を言いつけられたときぐらいしか離れる暇はない。

（用事がなければ作ればいいだけ）

猫猫は籠を持った女官に話しかける。女官の持っている籠には、上等の絹が入っており、西側の水場で洗わねばならなかった。水質に差があるのか、それとも洗う人間の違いなのか、東側で洗うとすぐに傷んでしまうのである。

猫猫は、絹の劣化は陰干しするかしないかの違いだとわかっていたが、それをいう必要はない。

「中央にいるというものすごく綺麗な宦官を見てみたい」

小蘭からついでに聞いた話をすると、快くかわってくれた。
色恋の刺激の少ないここでは、宦官ですら刺激の対象になるらしい。
女官を辞めた後、宦官の妻になるという話はちらほら聞く。女色に比べればまだ健全なのだろうが、やはり首を傾げてしまう。

（そのうち自分もこうなるのだろうか？）

己の問いかけに猫猫は腕を組んで唸った。

足早に洗濯籠を届けると、中央に位置する赤塗の建物を見る。東のはずれよりも洗練された、手の込んだ宮殿である。

現在、後宮で一番大きな部屋に住むのは、東宮のご生母梨花妃である。帝が后を持たぬ中、男児を唯一持つ梨花妃がここの最高権力者といえる。

そんな中、見えた光景はさほど市井と変わらないものだった。

罵る女とうつむく女と狼狽える女たちと仲裁する男である。

（妓楼とあんまり変わらないな）

至極冷静な感想を持ち、第三者、つまり野次馬に加わる猫猫。

罵る女は後宮の最高権力者で、うつむく女はそれに次ぐ存在、狼狽えるのは侍女たちで、仲裁に入るのはすでに男でなくなった薬師だと、周りのささやきと風貌からわかった。

「おまえが悪いんだ。自分が娘を産んだからって、吾子を呪い殺す気だろう！」

美しい顔は歪むとそれは恐ろしいものになる。幽鬼のような白い肌

と悪鬼のごときまなざしは、頬に手を添える美女に向けられている。
「そんなわけないとわかっているでしょう。小鈴も同じように苦しんでいるのですから」
赤い髪に翡翠の目を持つ女性は、冷静に答える。西方の血を色濃く継ぐ玉葉妃は顔を上げると医者の顔を見る。
「ですので、娘のほうの容体も見ていただきたいのです」
仲裁に入ったものの原因は医師にあるらしい。
医者が東宮ばかり見て、自分の娘を見ないことに抗議をしにきたようである。
母親としてはわからなくもないが、後宮という仕組みから男児優先は当然である。
医師にしてみれば、いわれのないと言いたい顔であるのだが。
（馬鹿だろう、あのヤブ）
妃二人のあんなに近くにいて気づかないとは。いや、それ以前に知らないのか？
乳幼児の死亡、頭痛、腹痛、吐き気。そして、梨花妃の白い肌とおぼつかない身体。
ぶつぶつとひとりごとをつぶやきながら、猫猫は騒動の場を後にした。
（なにか、書き物はないか）

と、考えながら。

よって、通り過ぎる人物に目もくれなかった。

3　壬氏

「またやってますね」

壬氏は端正な顔に憂いを含む。女性と見まごうような繊細な輪郭に、切れ長の目、絹の髪を布で包んで残りを背中に流している。

宮中の花たちがこんなところで騒ぎを起こすなどはしたない、それを収めるのが彼の仕事の一つだった。

人だかりを分けようとする中、一人だけ我関せずという雰囲気で歩いてくるものがいる。

小柄な下女で鼻から頬にかけてそばかすが密集している。目立った風貌ではないものの、自分に目もくれずなにかひとりごとをいう姿が印象に残った。

ただ、それだけのはずだった。

東宮が身まかれたという話が回ってきたのは、それからひと月もしない頃であろうか。

泣きわめく梨花妃は、先日よりもさらにやせ細り、大輪の薔薇といわれた頃の面影はなかった。息子と同じ病に侵されていることは明白である。

あれでは、次の子を望むこともできまい。

東宮の異母姉である鈴麗公主は、一時の体調不良から状態を持ち直し、母とともに東宮を失った帝を慰めるようになっていた。
帝の通いようから次の子も近いかもしれない。

同じように公主と東宮は原因不明の病にかかっていた。一方は持ち直し、一方は倒れた。
年齢による違いであろうか、三か月の差とはいえ乳幼児の体力には大きく影響を受ける。

しかし、梨花妃はどうであろう？
公主が持ち直したのなら、梨花妃も持ち直してもいいであろうに。
それとも、息子を亡くした精神的なものであろうか。

壬氏は頭にぐるぐると考えをめぐらせながらも、書類に目を通し、判を押していく。

なにか違いがあるとすれば玉葉妃のほうだろうか。

「少し留守にする」

最後の判を押し終わると、壬氏は部屋を後にした。

蒸したての万頭のような頬をした公主は、赤子の無邪気な笑顔を見せる。小さな手のひらはぎゅっと拳を作り、壬氏の人差し指を掴んでいた。

「これこれ、はなしなさい」

赤毛の美女は優しく娘をおくるみに包むと、籠の中に寝かせた。
赤子は暑いとおくるみをはねのけ、来訪者のほうを見ては言葉にもならない声を機嫌よく鳴らしていた。

「なにか聞きたいことでもあるようですが」

聡明な妃は、壬氏の思惑を感じ取っているようだ。

「なぜ、公主殿は持ち直されたのですか？」

単刀直入に申し上げると、玉葉妃はふっと小さな笑みをこぼすと懐から布きれを取り出した。
はさみも使わず裂いた布に、不恰好な字が書いてある。字が汚いというわけでなく、草の汁を使って書いたため、にじんで読みにくくなっているのだ。

『おしろいはどく、赤子にふれさすな』

たどたどしく書いたのもわざとであろうか？
壬氏は首を傾げる。

「おしろいですか？」
「ええ」

玉葉妃は乳母に公主を任せると、引出から何かを取り出す。
布にくるまれたそれは、陶器製の器だった。蓋を開けると、白い粉が舞う。

「おしろい？」
「ええ、おしろいです」

ただ白いだけの粉になにがあるのだろうとつまむ。そういえば、玉葉妃は元々肌が美しいのでおしろいをしておらず、梨花妃は顔色が悪いのをごまかすように塗りたくっていた。

「公主は食いしん坊でして、私の乳だけでは足りず、乳母に足りない分を飲ませてもらっていたのです」

赤子を生まれてすぐなくしたものを、乳母として雇い入れたのだ。

「それは、乳母が使っていたものです。ほかのおしろいに比べて白さが際立つと好んで使っていたものです」

「その乳母は？」

「体調が悪かったようなので暇を出しました。退職金も十分与えたはずです」

理知的で優しすぎる妃の言葉だ。

おしろいの中には鉛白を使われているものがある。おしろいの白さが際立つそれは、体の中に入り中毒症状を起こす。

使うものが母親ならば、胎児に影響を与え、生まれた後も授乳の際口に含むこともあるだろう。

壬氏も玉葉妃もそれがどんなものかわからない、ただそれが東宮を殺した毒だということは理解できた。

「無知は罪ですね。赤子の口に入るものなら、もっと気にかけていればよかった」

「それは私も同様です」

結果、帝の子を四人も失わせてしまった。母の胎内にいたものを加えたら、もっといるのかもしれない。

「梨花妃にも伝えましたが、私が何を言っても逆効果だったみたいです」

梨花妃は今も目にくまのはった顔色の悪い肌をおしろいで塗りたくっている。それが毒とも知らずに。

壬氏は生成りの布きれを見る。不思議とどこかで見覚えがあるような気がする。

たどたどしい字は、筆跡をごまかすようにも見える。しかし、どこかしら女性的な文字に見えた。

「いったい、だれがこんなものを」

「あの日、私が薬師に娘を見てもらうようにいったときです。結局、貴方の手を煩わせただけの後、窓辺に置いてありました。石楠花の枝に結んで」

では、あの騒動が原因でなにかしら気づいたものが助言したというのだろうか。

「宮中の医師にそのような遠回しなことをするかたはいらっしゃられないでしょう」

「ええ、最後まで東宮の処置がわからないようでしたから」

あのときの騒動。

そういえば、野次馬の中にひとりわれ関せずという下女がいたというのを思い出した。

なにかをぶつぶつ言っていた。

なにを言っていた？

『なにか、書き物はないか？』

ふと、なにかが頭の中につながった。

くくくっと、笑いがこぼれる。天女のような艶やかな笑みが浮かんだ。

「玉葉妃、この文の主、見つけたらどうなさいます？」

「それはもう、恩人ですもの。お礼をしなくてはね」

「了解しました。これはしばらく預かってよいですか」

「朗報を期待します」

壬氏はさわり心地のある布に記憶をたどらせた。

「寵妃の願いとあらば、必ずや見つけねばならぬな」

天女の笑みに、宝探しをする子どもの無邪気さが加わった。

4　天女の微笑（前書き）

役職とか規則とか深く考えずに読んでいただけると助かります。

4　天女の微笑

東宮が身まかれたのを知ったのは、夕餉の際に黒い帯が配られたときだった。
喪に服す意味合いで七日間つけるのである。

その際、食事にはただでさえ少ない肉類が全くなかったので口をとがらすものもいた。
端女の食事は一日二回、雑穀と汁物、時折、菜が一品振舞われる程度である。やせぎすの猫猫には十分な量であるが、足りないと思うものがほとんどだろう。

下女と一括りにいってもいろんなものがいる。
農民出身のものもいれば、町娘もおり、数は少ないものの官の娘もいた。親が官であればいくらか待遇はいいはずだが、それでも下働きの理由となると本人の素養の問題である。文字の読み書きもできないものを部屋持ちの妃にできるわけがない。妃というのは、職業である。

（結局、意味なかったのか？）

猫猫は東宮の病の原因を知っていた。

梨花妃と侍女たちは真っ白なおしろいをふんだんに使っていた。庶民には手を出せない高級品だ。

それは妓楼の高級遊女たちも使っていた。一晩で農民一生分の銀を稼ぐ妓女もいる、自分で買うものもいれば、貢物としてもらうものもいた。

顔から首にかけて真っ白にはたかれるそれは、妓女の身体を蝕み、幾人かを死に至らしめた。
おやじが「やめろ」といっても使い続けたからだ。
やせ細り、衰弱して死んでいく妓女を猫猫はおやじのそばで幾人も見てきた。
命と美貌を天秤にかけ、結局どちらも失ったのだ。
だから手短な枝を折り、簡単な文を書いて二人の妃の元に置いた。
まあ、紙も筆も調達できない端女の書いた警告を信じるとは思えなかったが。
喪が明けて、だれも黒い帯が見かけられなくなった頃、玉葉妃の噂を聞いた。東宮を失い、傷心の帝は、生き残った公主を慈しんでいるらしい。
同じくわが子を失った梨花妃のもとに通う話は聞こえない。
（都合のよいことで）
猫猫は魚のかけらがほんの少し入った汁を飲み干すと、食器を片づけて仕事場に向かった。
「呼び出し、ですか？」
洗濯籠を抱えた猫猫は宦官に呼び止められた。
中央にある宮官長の部屋に来いとのこと。

宮官とは、後宮を大きく分ける三部門の一つであり、下位に位置する女官のことをいう。他の二つ、部屋持ちの妃たちは内官、宦官は内侍省にあたる。

（なんの用だろう？）

宦官は周りの下女にも話しかけている。どうやら自分だけではないらしい。

きっと人出が足りないのだろう。

猫猫は籠を部屋の前に置くと、宦官の後について行った。

宮官長の棟は後宮と外部をつなぐ五門のうち、ひとつのそばにある。帝が後宮に訪れる際、ここの門を必ず通る。

呼び出されたとはいえ、あまり居心地のいい場所ではなかった。ようは頭が高いというものである。

隣の内官長の棟に比べ幾分劣るものの、中級妃の棟よりも豪奢な造りである。欄干の一つ一つに彫り物が施されており、朱の柱には鮮やかな龍が巻き付いている。

促されるまま部屋の中に入ると、大きな机がひとつあるだけで存外殺風景であった。中には猫猫たち以外の下女が十人ほど集まっており、不安となにかしらの期待とそしてどこか興奮したような表情を浮かべている。

「はい、ここまで。おまえらは帰っていいぞ」

（あれ？）

なぜだか不自然に区切られてしまった。猫猫のみ部屋に入り、残りの下女はいぶかしげに帰っていく。

定員というには部屋はまだ広いようであるが。

猫猫は首を傾げなら、周りを見ると女官たちの視線が一つに集まっていることに気付く。

部屋の隅に目立たぬように座る女性と、それに仕える宦官、少し離れて年嵩のいった女性がいる。中年の女性は宮官長であると記憶しているが、それよりも偉そうな女性は何なのだろう。

（むむ？）

女性にしては肩幅が広く、簡素な服を着ている。髪を巾でまとめ、残りを下ろしている。

（男なのか？）

天女のような柔らかい笑みを浮かべ女官たちを見ている。隣に控える宦官すら赤くなっている。

なるほど、皆が頬を染めるわけがわかる。

噂に聞いていたものすごく美しい宦官というのはこの男のことだろうと猫猫は思った。

絹糸のような髪、流れるような輪郭、切れ長の目と柳のような眉を持った絵巻物の天女もこれほど美しくはあるまい。

（もったいないなあ）

顔を染めることなく思ったのがそんな言葉である。大切なものがなくなってしまったので、子を成せないわけだ。あの男の子どもであれば、どれほど鑑賞に優れたものが生まれよう。

しかし、あれだけ人間離れした美貌があれば、皇帝も籠絡することもできるだろうと、不遜なことを考えていると、男は流れるような動きで立ち上がった。

机に向かい、筆をとると優美な動きでなにかをさらさらと書く。

にっこりと甘露のような笑みを浮かべ、男は書き物を見せた。

猫猫は固まった。

『そこのそばかすの女、おまえは居残りだ』

要約すればこんなことを書かれていた。

猫猫の動きを見逃さなかったのだろう。

満面の笑みが浮かんでいた。

男は書き物をしまうと、手のひらを二回叩いた。

「今日はこれで解散だ。部屋に戻っていいぞ」

下女たちはいぶかしみながら、後ろ髪ひかれながらも部屋を出る。

先ほどの書き物が何の意味を示しているのかわからないまま。

部屋を出る下女たちが皆小柄で、そばかすの目立つ容貌をしていることに猫猫は気が付いた。しかし、書き物を見ても何の反応も示さなかったのは読めなかったのだろう。
あの書き物は猫猫を指していたものではなかった。

他の下女とともに部屋を出ようとすると、がっしりと手のひらが肩に食い込んでいた。

恐る恐る振り向くと、まぶしくて目がつぶれるような天女の笑みがあった。

「だめじゃないか。君は居残りだよね」

いうまでもなく有無を言わさなかった。

5　部屋付

「不思議だよねえ、話に聞くと君は文字が読めないってことになってるんだけど」
「はい、卑賤の生まれでございますので。なにかの間違えでございましょう」

（面倒なので報告しませんでした）

とは、口が裂けても言わない。
しらばっくれる気満々である。
文字が読める、読めないで下女の扱いはそれぞれ違う。読めるほうが読めるほうで、読めないほうは読めないほうで役に立つのであるが、無知なふりをしていたほうが世の中立ち回り安いのである。

美しい宦官は壬氏と名乗った。
虫も殺さないような優美な笑みなのに、なにやら蠢くものを感じる。
でなければ、こうして猫猫を窮地に立てることはできまい。

壬氏は黙ってついてこいといった。
首を横に振れば、軽く首がとぶ使い捨ての端女は素直についていくしかなく、なにがこれから起こるのか、それをどううまく対処するのか思いをめぐらせていた。

こうして壬氏に連れて行かれる理由に思い当らないわけではなかったが、どうしてそれがばれたのか不思議だった。

妃に文を送ったことに。

わざとらしく壬氏の手には、布きれがあった。それには、汚いたどたどしい文字が書かれていることであろう。

字が書けることは誰にも黙っていたし、薬屋をしていて毒物に詳しいことも黙っている。いうまでもなく、筆跡でばれることはない。

周りを確認して置いてきたはずだが、誰かに見られていたということだろうか。

小柄でそばかすのある下女に目安をつけたのだ。

まず、先に文字が書けるものを集め、筆跡を集めたに違いない。字というものは崩して書いてもくせが残るものである。

その中に適合者がいないとなると、次は文字を書けないものを集める。

読める、読めないの判断は先ほどの通りである。

（なんて疑い深いんだ。ってか暇人すぎるだろ）

悪態をついているうちに目的地に到着した。

案の定、玉葉妃の住まう宮であった。

壬氏が扉を叩くと、凛とした声が短く「どうぞ」といった。

中に入ると赤い髪の美女が柔らかい巻き毛の赤子を愛おしそうに抱いていた。

赤子の頬は薔薇色で、母親譲りの色素の薄い肌をしている。

健康そのもので、半開きの口から可愛らしい寝息が聞こえる。

「かのものを連れてまいりました」
「お手数をかけました」
先ほどの崩れた口調ではない。
分をわきまえた言動である。
玉葉妃は壬氏とはまた違った温かい笑みを浮かべると、猫猫に頭を下げた。
猫猫は驚いて目を見開く。
「そのようなことをされる身分ではございません」
失礼のないように、言葉を選びながら述べる。
「いいえ。私の感謝はこれだけではありません。やや子の恩人ですもの」
「なにか勘違いなされているだけです。きっと人違いではありませんか」
冷や汗をかく。
丁寧に言ったところで否定ということに変わりない。
首ははねられたくないが、関わり合いにもなりたくない。長いものに巻かれたくないのである。
玉葉妃が少し困った顔をしたのに気付いた壬氏は、ぴらぴらと布きれを見せつける。
「これは下女の仕事着に使われる布だって知っていますか？」
「そういえば、似ていますね」

あくまでしらばっくれる。
無意味だとわかっていても。

「ええ、尚服に携わる下女用のものですね」

宮官は六つの尚に分けられる。衣服に携わるのが尚服で、洗濯係を主とする猫猫はそこに分けられる。

生成りの裳は、壬氏の持っている布と同じ色をしている。
裳の内側、ひだでうまく隠れている部分に、奇妙な縫い目があることも調べればわかることだろう。
つまり、証拠はその場にあるということだ。

壬氏が玉葉妃の前で無礼な真似をするとは思わないが、しないとも限らない。

覚悟を決めるしかなかった。

「私は何をすればよろしいのでしょうか？」

二人は顔を見合わせると、肯定の意味でとらえた。
どちらも、目がつぶれるほどの優しい笑みを浮かべる。

安らかな赤子の寝息が聞こえる中で、猫猫は消え去りそうな小さなため息をついた。

猫猫は翌日から、ほとんど何もない荷物をまとめなくてはならなか

った。

小蘭や同部屋のものは皆うらやましそうにしている。

どうして、そうなったのか追及してくる。

猫猫は乾いた笑みを浮かべはぐらかすしかなかった。

猫猫は、皇帝の寵妃の侍女となった。

まあ、いわゆる出世である。

6　毒見役

部屋付の宮女、しかも帝の寵妃の侍女ともなれば、待遇は高くなる。今まで金字塔の底辺にいた官位は真ん中くらいまで上がっている。説明によると、給金も跳ね上がっているらしいが、その二割は売りとばした農民のもとに手数料として渡されるのでおもしろくなかった。

今までのたこ部屋でなく、狭いながら一室を与えられた。
菰を重ねて敷布をかけただけの布団から、寝台つきに階級が上がった。寝台二つ分の広さしかない部屋であるが、朝同僚の身体を踏まずに起きることができるのは正直うれしかった。
うれしい理由はもう一つあるのだが、これは後程語ることになろう。

玉葉妃の住まう翡翠宮には、猫猫以外に四人の侍女がついている。公主が離乳食を取り始めたので、乳母を新たに雇うことはなかった。梨花妃が十人以上つけているのに比べると、随分数が少ない。

正直、最下層の小間使いだったのがいきなり同僚になりましたといわれて侍女たちは難色を見せたのだが、猫猫が思うような嫌がらせはなかった。
むしろ、同情的な目で見られていた。

（なぜに？）

その理由はすぐにわかった。

薬膳をふんだんに使った宮廷料理が目の前にある。
玉葉妃の侍女頭である紅娘は、菜を一つずつ小皿に盛ると猫猫の前に置いた。

すまなそうに玉葉妃がこちらを見ているが、止める様子はない。
残り三人の侍女たちは、哀れな目でこちらを見ている。

毒見役というものである。

東宮のことで皆、神経質になっている。
公主が病になったのもどこからか毒が紛れ込んでいたのではないかという噂が回っていたからだ。毒の元を知らされていない侍女たちは、何に紛れ込んでいるかわからない毒を恐れていたに違いない。

そこで、毒見役専門に下女が送られてきたのなら、使い捨ての駒としてみてもおかしくない。

玉葉妃だけでなく、公主の離乳食、皇帝訪問の折の滋養料理も毒見のうちに含まれる。

玉葉妃の懐妊がわかった頃、二回ほど毒が盛られていることがあった。一人は軽いものですんだが、もう一人は神経をやられて手足が動けなくなっている。

今まで恐る恐る毒見役をやってきた侍女たちは、正直、感謝をしていることだろう。

猫猫は盛られた皿を見ると眉を寄せる。陶器製の皿だ。

（毒が怖いなら銀にするのは基本でしょうに）

箸でつまむとなますの具をじっくり見る。

匂いを嗅ぐ。

舌の上にのせて、しびれがないのを確かめるとゆっくり嚥下した。

（正直、毒見に向かないのだが）

即効性の毒ならともかく、遅行性の毒であれば猫猫に毒見を頼んでも意味がないのである。

実験と称し、少しずつ毒に慣らした身体を作ってきた猫猫は、おそらく大抵の毒は効かなくなっていることだろう。

これは、薬屋の仕事としてではなく、猫猫の知的欲求を満たすための行為である。時代と場所が違えばきっとこう呼ばれていることだろう、『狂科学者』と。

薬師の技術を教えてくれたおやじどのですら、呆れているほどだった。

身体の変化ではなく、自分の知識の中でそれらしい毒はないと確認すると、ようやく玉葉妃の食事が始まる。

次は、味気ない離乳食の番だった。

「皿は銀製のものに替えたほうがよろしいと思います」

感情をこめることなく上司の紅娘に伝えた。

一日目の活動報告として、紅娘の部屋に呼び出されたのだ。部屋は広いが華美な装飾はなく、実用的な彼女の人柄を表しているようで

ある。

三十路を前にした黒髪の美しい侍女頭は溜息をつく。

「ほんと、壬氏さまのいったとおりね」

呆れた顔で、わざと銀食器を使わなかったことを告白した。

壬氏の指示だった。

猫猫は無愛想な顔がさらに機嫌悪くなるのをこらえながら紅娘の話を聞く。

「あなたがどういう理由で、その知識を隠していたかしらないけど、まさに毒にも薬にもなる能力ね。字が書けることも言っていれば、お給金はもっともらえたはずだけど」

「薬屋の真似事を生業にしていたからです。かどわかされて連れてこられたのに、人さらいどもに今も給金の一部が送られていると考えると腸が煮えくり返ります」

「つまり、自分の給料が減ってでも、そいつらに酒代を与えてなるものかということね」

賢い女官は猫猫の動機を理解してくれたらしい。

「無能なら二年の奉公でいくらでも替えがきくものだしね」

ついでに理解しなくていいところまで、察してくれた。

紅娘は卓子の上にある水差しを取ると、猫猫に持たせた。

「これは……」

猫猫がたずねる間もなく、彼女の手首に痛みが走った。衝撃で持たされた水差しが床に落ちる。陶器製のそれに大きなひびが入る。

「あらら、これって結構高いのよ。下女程度のお給金じゃあ、払えないくらいにね。これじゃあ、実家への仕送りもできないわね。むしろ請求するくらいじゃないと」

猫猫は紅娘がいわんとしていることがわかったらしく、無表情の中に皮肉めいた笑みを浮かべていた。

「もうしわけありません。毎月、仕送る分から差し引いてください。足りなければ、私の手持ちのほうからもお願いします」

「ええ、宮官長のところで手続きしておくから。それと」

紅娘は落ちた水差しを卓子の上に置き、引出から木簡を取り出した。さらさらと筆を滑らせる。

「これは、毒見役の追加給金の明細よ。危険手当というところね。気になる点があれば言ってちょうだい」

金額は、猫猫の現在の給料とほぼ同額だった。手数料でとられる分がないだけ、猫猫は得したことになる。

（飴の使い方がうまいことで）

猫猫は深く頭を下げると部屋をあとにした。

7　媚薬

元々いた四人の侍女たちはたいへん働き者であった。
広さはそれほどないものの、翡翠宮はほぼ四人で回っている。尚寝、つまり部屋掃除専門の下女も来るのだが、寝所はもとより内部の掃除はすべて四人の侍女たちで終わらせる。

新参者の猫猫の仕事はご飯を食べることくらいしかないわけだ。

一番嫌な仕事を押し付けたことに罪悪感を持っているのか、それとも自分の領域を荒らされたくないのか、紅娘以外の侍女は誰も猫猫に仕事を押し付けることはなかった。むしろ、手伝おうとするのを「いいのよ」とやんわりと断って、部屋に押し込めていた。

（落ち着かない）

小部屋に押し込まれて、呼ばれるのは二回の食事と昼の茶会、そして数日に一度訪れる帝の滋養強壮料理を食べることくらいである。
たまに、紅娘が気をきかせて用事を頼むのだがすぐに終わる簡単な仕事だけである。

（なにこれ、食っちゃ寝だろ）

毒見に加えて、食事も以前より豪華になった。茶会には甘い菓子があり、余れば猫猫にも配られる。
蟻のように働くことがなくなったので、栄養はそのまま肉になっていった。

（家畜にでもなった気分だ）

毒見役をやるにあたり、猫猫に不適な点はもう一つある。
猫猫はもとから痩せているので、毒にあたって痩せたとしてもわかりにくいからだ。
それに致死量は体の大きさに比例する。太ればそれだけ生き残る可能性が高くなる。

猫猫としては痩せるほどの毒がわからないわけでなく、致死量をこえても生き残る自信があるのだが周りはそうでないらしい。
小柄でやせぎすな猫猫は幼く見えるらしい、可哀そうな使い捨ての駒に三人の侍女たちは同情していた。
お腹いっぱいでも粥はおかわりをつがれ、菜の具は他のものより一つ多い。

（妓楼の小姐たちを思い出す）

無愛想で無口で可愛げのない生き物であるはずが、なぜか遊女たちに可愛がられていた。ことあるごとに、菓子を持たされ、飯を食わされた。

ちなみに猫猫は気づいていないようであるが、可愛がられる理由はあった。

猫猫の左腕には無数の傷がある。
切り傷、刺し傷、火傷の痕に針のようなものが刺された痕。
小柄でやせぎすで腕には無数の傷。
よく腕から包帯が巻かれ、たまに青白い顔で往来で倒れることもあった。
無愛想で無口なのも彼女が今まで受けていた仕打ちの結果だと皆が涙を飲んだ。

皆、虐待を受けているものだと思っているようだが、真実は違う。
全部、猫猫本人がやったことだ。
傷薬や化膿止めの効能を調べ、毒を少しずつ飲み耐性をつけ、時に自分から毒蛇を噛ませることもあった。たまに量を間違えて、倒れることもあった。
ゆえに傷は利き腕でない左にのみ集中している。
別に痛みが好きという被虐的な趣味はかけらもないが、知的欲求が薬と毒物に傾きすぎている点でごく普通の娘とはかけ離れていた。
そんな娘を持って迷惑きわまりないのがおやじどのである。
花街に暮らす自分の娘が遊女以外の道を進めるようにと、薬の知識と文字を教えたというのに、いつのまにいわれなき誹謗中傷を受けるようになった。
一部のものは理解していたが、多くのものはおやじどのに冷たい眼を向けていた。
年頃の娘が、実験と称し自傷行為を繰り返すなど思いもしない。
などというわけで、親に虐待された挙句、後宮に売りとばされ、使い捨ての毒見にさせられた哀れな娘と皆に思われている。
（このままでは豚になる）
そんなことを考えるようになった頃、猫猫の前に嫌な訪問者が現れるのであった。

人間離れした美貌を持つ青年は、天上人の笑みをたやさず浮かべていた。

三人の侍女は頬を染めながら客人を迎える茶を用意する。
壁の向こうから小競り合いが聞こえるところをみると、だれが準備するのか言い争っているらしい。

呆れた紅娘は自ら茶器を用意すると、三人に部屋に戻るように指示した。

毒見役の猫猫は銀の茶椀を持つと匂いを嗅いで口に含んだ。
さっきから壬氏がずっとこっちを見ているので居たたまれない。目線を合わせないように目を細める。

若い娘であれば、たとえ宦官であろうともこれだけの美丈夫に見つめられて悪い気はしないはずだが猫猫はそうではない。興味が他人のそれよりもずれたところにあるため、壬氏が天女のように美しいと理解していても、一線を引いてみている。

「これは貰いものなんだが、味見してくれないか？」

籠のなかに、包子が入っており猫猫はつまんで中を割ってみる。餡にひき肉と野菜が詰まっている。
匂いを嗅ぐとどこかで嗅いだことのある薬草の匂いがした。

一昨日食べた強壮剤と同じものだ。

「催淫剤入りですね」
「食べなくてもわかるんだ」

「健康には害はありませんので、お持ち帰りください。美味しくいただいてください」
「いや、貰った相手を考えると素直に食べれないもんだろ」
「ええ、今晩あたり訪問があるかもしれませんね」
淡々と述べる猫猫に、想像したものと当てが外れた壬氏はなんともいえない顔をしている。知っていて催淫剤入りの饅頭を食べさせようとしたのだ、毛虫を見るような目で見ないだけましなのである。ところでどんな相手からもらったものであろう。
二人のやり取りに、玉葉妃は鈴の鳴るような声で笑う。足元には寝息を立てる小鈴公主がいる。
猫猫は一礼すると客間をあとにしようとする。
「ちょっと、待った」
「なにか御用でしょうか？」
壬氏は玉葉妃と目を合わせ、二人は頷いている。どうやら、猫猫が来る前に本題は伝えられているようだ。
「媚薬を作ってくれないか？」
一瞬、猫猫の瞳に驚きと好奇の目が浮かんだ。
その薬をどう使うのかは知らないが、それを作る過程は猫猫にとって至福の時に違いなかった。
唇が笑みを作るのを押さえつつ、猫猫はこう述べた。
「時間と材料と道具。それがあれば」

媚薬に準ずるものなら作れます、と。

8　薬棚

どうしたものか。

柳の眉に憂いをひそめ、腕を組んでいる。

性別さえ違えば傾国となるといわれた壬氏であるが、本人がその気であれば性別など意味がないものといえる。

今日もまた後宮の中級妃ひとり、下級妃ふたり、殿中でも武官と文官ひとりずつに声をかけられた。武官には強壮剤入りの点心までいただいたので、今日は夜勤を行うことなく宮中の自室に戻っている。自衛のためであり、さぼりではない。

机の上にある巻物にさらさらと名前を書く。

今日声をかけてきた妃たちの名前である。帝の御通りがないからといって、違う男を寝所に引き入れようなど甚だしい。正式な報告ではないものの、今後、沙汰が下ることであろう。

自分の美貌が女官たちの試金石だということを籠の小鳥たちは幾人わかっているだろうか。

妃の位は、まず両親の家柄に加え、美しさ、賢さを基準に選ばれる。家柄、美貌に比べ、賢さというのは難しい。国母となるにふさわしい教養を持ち、それに加えた貞操観念も持ち合わせねばならない。

意地の悪い我が皇帝は、選出基準に壬氏を使うことにした。

玉葉妃と梨花妃を薦めたのも壬氏である。玉葉妃は思慮深く謙虚で

あらせられ、梨花妃は感情的な性格があるものの誰よりも上に立つにふさわしい気質を持っている。
どちらも皇帝に対する忠誠を持ち、邪まな感情は見当たらなかった。
梨花妃に至っては心酔の域に達していた。

吾主ながらひどいかたである。

自分に国に都合のよい妃を揃えさせ、子を産ませ、その能力がないとあらば切り捨てる。

今後、寵愛は玉葉妃に傾き続けるであろう。
幽鬼のようにやせ細った梨花妃の元に通ったのは、東宮が身まかれたときが最後だった。

梨花妃以外にも必要のなくなった妃は幾人もいる。それらは、折をみて実家に帰され、また下賜される。

重ねられた書類を一枚引き抜いた。
位は正四品、中級妃にあたる。名を芙蓉といった。
先日、異民族を撃退した勲功としてとある武官に下賜されることになった妃である。

「さてさて、上手くいくことでしょうか？」

己の頭の設計通りに事を運べば、問題はないはずである。
それには、無愛想な薬師どのの協力がいくらか占めている。

自分を欲情の相手としない人間は皆無ではないが、毛虫のごとく見られたのは初めてである。
本人は上手く隠したつもりだろうが、表情にうっすら浮かんだ侮蔑

の目は隠しきれていない。

思わず笑いがこみ上げる。天上から落ちる甘露のような笑みに少しだけ底意地の悪さをまじえて。

別に被虐嗜好はないのだが、妙に面白かった。

「今後、どうなることやら」

壬氏は書類を硯の下に置くと、眠りにつくことにした。

夜中、訪問者が来ても問題ないように、施錠はしっかりとかけて。

○●○

万能薬という言葉はあるが、実際万能である薬は存在しない。

おやじどのの言葉に反感を持っていた頃が猫猫にもあった。

どんな病にも、どんな人間にも効く薬を作りたい。そんなわけで、他人が目を背けたくなる傷を作り、新しい薬を開発してきたのであるが万能である薬はいまのところ完成の目途はない。

大変気に食わないことであるが、壬氏の持ってきた話は猫猫の興味を持たせるに十分であった。

後宮に入ってからというものの、甘茶くらいしか作れなかったのだ。材料になる薬草は驚くくらい後宮内に生えていたのだが、道具もなく、大部屋で怪しげな行為もできずに我慢してきたのだ。

材料の調達にとでかけるが表向きの理由として洗濯籠を背負う。紅娘の計らいで、今後洗濯係は猫猫になろう。

洗濯ものを届けに来たふりをして、前もっていわれていた医務室に入る。中には、以前狼狽えるしかなかったあの医者と、壬氏によくついている宦官がいた。

医師は薄いどじょうのようなひげを触れながら、値踏みするような目で猫猫を見る。

なぜこんな小娘が自分の領域を荒らすのだと言わんばかりだった。

（醜女をあまりじろじろみないでくださいまし）

医者に比べて宦官は主に接するように丁寧な動きで猫猫を案内する。

三方を薬棚で囲い込まれた部屋に入れられたとき、猫猫は後宮にきて一番の笑みを浮かべていた。頬は赤く染まり、眼はうるみ、一文字だった唇が柔らかい弧を描いている。

宦官が驚いた表情で猫猫を見るが、そんなの関係なかった。

引出の見出しを眺め、珍しい薬を見つけるなり踊るような奇妙な動きをする。喜びがあふれ出て、頭の中で納まりきれなかった。

「なんかの呪いか、なにかか？」

小一時間そんなことを繰り返したところだった。

壬氏が奇異の目で猫猫を見ていた。

引出の端から順につかえそうな材料を集める。それぞれを薬包紙に包み、筆で名前を書く。まだ木簡が書物として使われる中で、ふんだんに紙を使うことは贅沢である。

どじょうひげの医師は、何者だとのぞいてくるので、宦官は戸を閉めた。宦官の名前は高順というらしい。

引出が高いところにあるのは、高順がとってくれる。その上司はなにもしない、しないならどこかいけよ、と無表情の奥に猫猫は思う。

引出の一番上に、猫猫は見覚えのある名前をみつけて身を乗り出した。

高順に手渡されたそれをみると、なんともいえない表情をする。

何かの種子が手のひらにおさまっている。

「これだけじゃあ、足りない」

「ならば、用意すればいいだけのことだ」

無駄に笑顔を振りまいてみていただけの美丈夫は簡単に言ってくれる。

「西の、さらに西の南方にあるものですよ」

「交易品を探せば見つかるだろう」

壬氏は種子を一つつまむ。杏仁に似た形をしたそれは、独特の匂いを発していた。

「これはなんというんだ？」

青年の質問に猫猫は答える。

「可可（カカオ）？です」

と。

9　可可？（前書き）

玉露で酔っぱらう人たちがいた頃の話です。

9　可可？

「お前の腕が想像以上のものだということがわかった」

壬氏は呆れた声で猫猫にいった。

「私もここまでとは思いませんでした」

目の前の惨状になかば放心していた。

「ああ、そうだな」

いつもの無駄に輝いた笑みはない。

ただただ疲れた顔をしている。

「どうしてこうなったんだ」

それは、数時間前にさかのぼる。

届けられた可可（カカオ）？は、種子のままではなく粉末になったものだった。

他に材料として猫猫が頼んだものはすべて翡翠宮の台所に運び込まれている。

三人の侍女たちは野次馬根性で眺めていたが、紅娘が注意すると元の持ち場に帰って行った。

牛乳、乳酪、砂糖、はちみつ、蒸留酒に乾燥した果実、匂い付けの香草油。どれも栄養価の高い高級品であり、同時に強壮剤として利用されるものである。

猫猫は一度だけ可可（カカオ）？を食べたことがあった。粉を練って砂糖を混ぜ固めたもの、巧克力（チョコレート）とくれた遊女は言った。

指先ほどのかけらだったが、食べるときつめの蒸留酒を飲み干した気分になった。妙に気持ちが明るくなった。

邪な客が売れっ子妓女の関心をかうために珍しい菓子だといって渡したものである。残念なことに、様子の違う猫猫を見て、妓女は怒り、やり手婆に出入り禁止を食らう羽目になったという。

その後、種子をいくつか手に入れることはあったが、それを薬として扱うことはなかった。

花街の薬屋にそんな高級品を求める客はいなかったのだ。

記憶の中の巧克力は油脂で固めたものだと残っている。薬や毒物の匂い、味を完璧に覚えている猫猫は、食材に関しても鮮明な記憶を持っている。

まだ暑い季節であり、乳酪でうまく固められるとは思えないので、果実を包み込むことにした。氷があれば完璧なのだが、さすがにそれは無理だろうと材料の中に入れなかった。

代わりに大きな素焼きの水瓶を用意する。水が半分ほどはってある。水の蒸発により内部は外気より幾分涼しく、ぎりぎり油脂が固まる温度だろう。

猫猫はかき混ぜたそれを匙ですくい、口に含む。

苦味と甘味と他に気持ちを高揚させる成分が舌を通じて感じる。

昔に比べて、酒にも毒にも強くなった猫猫は、以前ほど高揚した気分にならなかったが、それでも効き目が強いと感じられた。

（もう少し小さくつくったほうがいいかな）

果実をさらに半分に切り、褐色の液体に浸す。

皿にのせ、中空に浮かすように壺の中にしまう。

蓋をかぶせ、菰で隠すとあとは固まるのを待つだけである。

壬氏が試作品を取りに来るのは夕刻のことで、それまでに固まっているだろう。

（少し余ったなあ）

褐色の液体はまだ残っている。材料はとても高級品だし、栄養価も高い。媚薬といっても、猫猫にはそれほど効くものでもないので、後で食べることにした。麺麭を立方体に切り、しみこませる。これならば、冷やす必要もなさそうだ。

蓋をし、棚に置く。

残った材料はまとめて自室に置き、洗い物をするために外の水場に向かった。

このとき、切り分けた麺麭も自室に運び込むべきだったが、頭の中からはずれていた。味見で少し高揚していたせいかもしれない。

まあ、後の祭りである。

その後、紅娘に用事を頼まれたり、ついでに外に生えている薬草を摘みにいったりしている間に事は起こっていた。

洗濯籠に薬草を抱えてほくほくしている中、真っ青な顔をした紅娘と、憂いを含んだ玉葉妃が待っていた。高順もいることから、壬氏も来ているのだろう。

額を押さえる紅娘が台所をさしているのをみて、猫猫は籠を高順に押し付け現場へと向かった。

呆れ顔の壬氏がこちらを見る。

仲良く抱き合うように眠る三人の侍女たちがいた。胸元ははだけ、裳はふくらはぎまでめくれていた。皆が皆、幸福そうな顔で頬は紅潮している。

事前とか事後とか、不遜な言葉が頭をよぎったが、考えないようにした。

むしろ考えたくなかった。

卓の上には、褐色の麺麭があった。

数は三つ足りなかった。

紅娘と高順と猫猫で侍女たちをそれぞれの部屋に寝かせると、疲れがどっときた。

居間では玉葉妃と壬氏が物珍しそうに巧克力(チョコパン)麺麭を眺めている。

「これが、例の媚薬なの？」
「いいえ、それはこちらのほうです」
猫猫は果実を包んだものを差し出した。親指の爪ほどの粒が三十ほど並んでいる。
「じゃあ、こっちは何なんだ？」
「私の夜食です」
言葉を間違ったらしく、明らかに周りが引いている。高順や紅娘も異物を見る目をしていた。
「酒や刺激物に慣れていると、効き目はそれほどありません」
実験に使った毒蛇を酒に漬けて飲んでいたので、猫猫は酒豪だった。酒は薬の一つだと猫猫には分類される。
しげしげと、麺麭をつまんでみる壬氏。
「では、私が食べても問題ないのかな」
『それはおやめください！！』
紅娘と高順の声が重なった。高順の声を初めて聞いた気がする。
壬氏は冗談だよ、と麺麭を皿に置いた。
たしかに、皇帝の寵妃の前で媚薬を口にするのは不遜であるが、それ以上に間違っても天女の美貌が頬を染めながら迫ってきたら誰しも理性のたがが外れかねないためであろう。

「今度、帝のために作ってもらおうかしら。まんねりを防ぐためにも」
「いつもの強壮剤の三倍は効くと思いますけど」
「三倍……」
持続のほうかしら、と玉葉妃の小声は聞こえなかったことにする。
さすがにきついらしい。
媚薬を蓋付きの容器に移し替え、壬氏に渡す。
「効き目が強いので、一粒ずつを目安にお願いします。食べ過ぎると血が回り過ぎて、鼻血が出ると思いますので。また、意中の相手と二人きりのときに使用してください」
注意事項を終えると壬氏は立ち上がる。
帰り支度をするため、高順と紅娘は部屋を出る。
玉葉妃も一礼すると、籠の中で眠る公主とともに部屋を後にした。
猫猫は麺麭の皿を片付けようとすると、後ろから甘い匂いがした。
「思った以上のものを作ってくれてありがとう」
甘いはちみつのような声が聞こえる。
髪をすくい上げられ、首になにか冷たいものが当たっていた。
振り返ると、片手を振りながら壬氏が部屋を出ていく。
「なるほど」

皿に目を落とすと、麺麭の数が一つ足りない。
犯人の目安はついている。
「被害者がでなければいいけど」
他人事のように猫猫は呟いた。
夜はまだ長い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9636x/

薬屋のひとりごと

2011年10月30日06時13分発行